

# みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 母系社会の男と女： ミクロネシアの島に暮らす人びと

|       |                                                                                                   |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: ja<br>出版者:<br>公開日: 2014-03-26<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 須藤, 健一<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10502/5192">http://hdl.handle.net/10502/5192</a>                   |

■ミクロネシアの島に暮らす人びと

# 母系社会の男と女

須藤健一・神戸大学教授



女たちは田へ（タロイモの収穫）

母系制といい、母系社会という。それは、どのような社会なのか。南太平洋の美しいサンゴ礁の島、サタワルの人びとの日々の暮らしを通して見た「家族」のありよう、「男と女」の関係とは――。

歴史の荒波にもまれながら生き続けた、伝統社会を支える原理とは何か、その今日の意味を問う。



男たちは海へ（カメ漁）

## はじめに——母系社会とは何か

一口に母系社会といっていますが、ひじょうに多様で、世界の民族社会に広く分布しています。生業経済の面から分類しますと、イモ類などの根栽農耕を行うアフリカ、オセアニアの熱帯地域から、北米やオーストラリアの採集狩猟民、アジアの焼畑や水田農耕民の間にも見られます。インドネシア、スマトラ島のミナンカバウやガーナのアシヤンティの社会のように、王国を形成したものもあります。

社会人類学では、居住の様式等によっていくつかのタイプに分けますが、これもおおざっぱな目安でしかありません。加藤剛さんが調査されたスマトラのミナンカバウ族の伝統的な母系社会というのは妻間婚であった時代から、大きな一軒の家に婿たちが共住する形態をとるものから、ここで紹介するミクロネシアの母系社会のように、婿入り婚の形態、あるいはパラオやメラネシアのトロブリアンド島のように嫁入り婚をして、それからまた母方オジさんの家に移るといような形態をとるものなど、居住の様式でいえば三種類に大まかに分けられます。しかし、いろいろな人間関係、社会関係、あるいは財産や地位にたいする権利などからみますと、こういう社会はひじょうに複雑多様

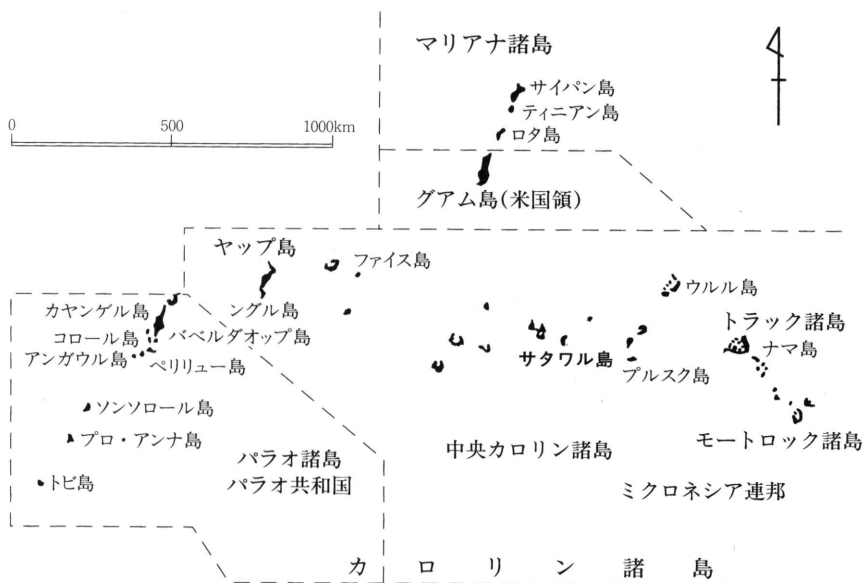
です。では母系社会とは何かというと、母系の出自、いわゆる母子の血縁ないし系譜関係に基づいて親族集団（出自集団）をつくり、母系の出自に基づいて財産の相続や地位の継承を行うような社会、いいかえれば、男性の血縁はまったくといっていいほど役に立たない社会、これを母系制社会という、定義はそれぐらいのものです。

そこで、もう少し具体的にミクロネシアの母系社会を対象にしながら、社会のしくみ、人間関係などに焦点をあてて、母系社会における男と女の役割について話題を提供したいと思います。

## サタワルの母系社会

私が調査した母系社会は、ミクロネシア連邦のトラック（チューク）州のトラック諸島と、ヤップ州のサタワル島、およびパラオ共和国のパラオ諸島の島社会です。なかでもサタワル島は、ひじょうに小さな島です（図1 六二ページ）。周囲六キロ、面積一平方キロ、すなわち一〇〇ヘクタール、一〇〇町歩で、一九八〇年当時、島の人口が五〇〇というようなサンゴ礁の島ですが、この島の人びとの生活について、はじめにお話しします。

■婿入り婚 母系社会のサタワルにおいては、婿に入った



部分拡大図（破線は国、自治領の境界を示す）



海拔数メートルのサンゴ礁の島。ヤシとパンノキに覆われている。いまはモーターボートが定期船と島の間の輸送を行っている。

夫は「奴隷」さ  
ながらの生活を  
しなければいけ  
ない。働きバチ  
になって、妻お  
よび妻一族に貢  
献しなければい  
けない。しかも、  
父親として子ど  
もを手塩にかけ  
て育てますが、  
子どもが成長す  
ると、自分より  
母方のオジさん  
のいうことをき  
くという、ひじ  
ょうにしがた  
い父親稼業なん  
です。そのうえ妻  
に気に入られな  
ければ、三下り  
半をつきつから

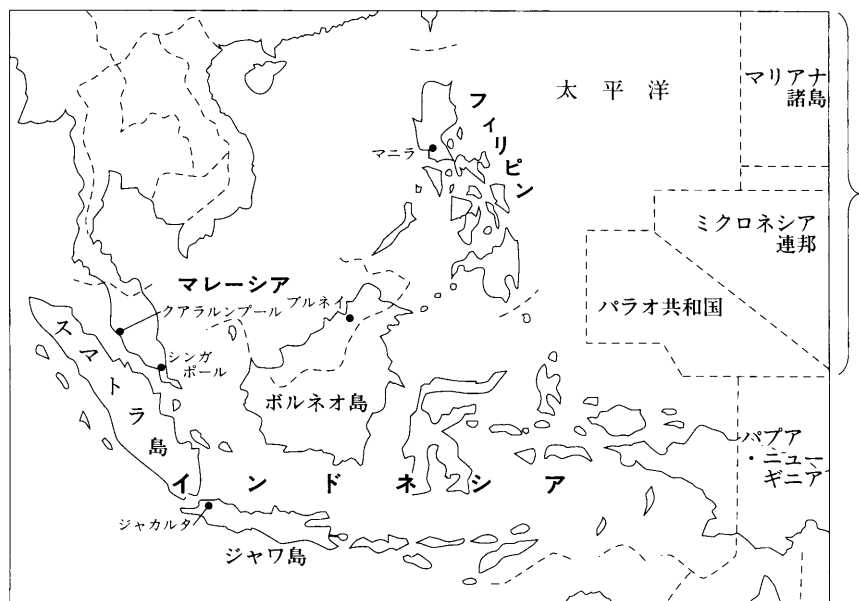


図1 ミクロネシア地域の

れて、実家へ戻される。婿に入った男というのは、まったく地位が低いという印象を受けます。

そういう意味で、婿入り婚の社会というのは、男性の婿としての立場と、それから母系の血縁につながる親族集団の成員としての自分の立場という一八〇度、顕著に対立した男性の地位の違いが明確な社会です。

このような母系制社会は、ミクロネシアでは広範に見うけられます。西はパラオから、東はマーシャル諸島にいたるまで——ヤップ島を除いてすべて母系制社会で、だいたいの社会のしくみも、ほとんど共通しているといっていでしょう。

それで、ここではとくに母系社会の男と女の地位と役割に焦点を絞ってお話しますけれども、こういう島の環境で生活していくうえで、男女がそれぞれどのような役割、ジェンダーを負わされているのか、あるいはどのような経済活動に責任をもっているのか、ざっと見ていきたいと思います。

■男と女の役割 基本的に女性には農耕で、男性は漁労、航海・交易に従事しています。ここで興味深いのは、男が肉体的に強いからといって、奥さんの田んぼでイモの栽培を手伝ってはいけない、というタブーが課せられていることです。それはなぜか。彼らの説明によると、農耕を司る神

が男の匂い、すなわち魚の匂いとか海の匂いをきらうからだ、もし男が行けば農耕の神がタロイモを枯らしてしまうという。現在、この島の人びとはキリスト教を信仰していますが、このタブーは厳格に守られている。逆に女性はカヌーに乗って男たちといっしょに魚獲りに行つてはいけない。女の匂い、つまり血の匂いによつて海の神が魚を隠してしまうからだという。ですから男は、無人島に魚やカメを獲りに行くときにも、その前日は女性との営みもタブーです。カヌー小屋で寝泊まりして、翌朝、漁に出かけていく。このことは彼らにとつて、ただ、たんに生業の分業ということより以上に、タブーを犯した場合に、超自然的な何かによつて制裁を受けるといふ、ある種の宗教的な観念と結びついた意識が強いということを示しているといえます。

ここで女性が農耕を担っているということは、大きな意味をもっています。つまり主食を女性が賄うわけですから、島という環境においては、女性が経済的に自立しているということがはつきりいえるわけです。男は動物性蛋白源を補給するか、あるいは、ほかの島から日用品を持つてくるだけで、日常的な食糧資源生産は女性が行っているということが一つの特徴としてあげられると思います。

このような男と女の伝統的な経済活動も、市場経済にく



唯一の換金作物、コブラを運ぶ。2 俵(100キロ)で25キロの米1 俵が買える。

みこまれることによって、その境界があいまいになってきました。ドイツ統治(一八九八年)以降、この島にもココヤシの植栽プランテーションができて、コブラ(ココヤシの実)が換金作物として売れる時代になったからです。こういう換金作物は、夫

婦あるいは母系大家族の男女共同の作業でヤシの実を集め、割り、なかの実を取り出して乾燥するという作業を行います。そのほか現金収入の道としては島にある学校の先生、あるいは診療所の医者など、政府の公務員としての給与所得がありますが、この公務員のほとんどが男性です。女性がこういう公務員になるということは一九八〇年代は

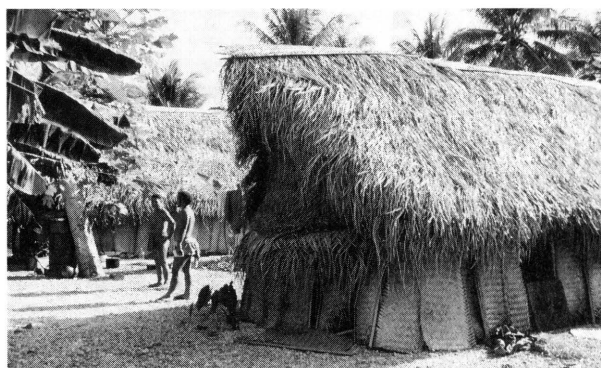
皆無でした。現在では大学の教育学部出身者もいますから、そういう女の人が何人か島の小学校の先生をやっています。が、やはり社会進出という点では、男性が卓越してきているといえます。

### 母系社会の成り立ち——リニージとクラン

はじめに、母系社会についての定義を簡単に申しましたが、この母系社会を構成する単位、その成り立ちについて、ここで説明しておきたいと思います。

■土地の所有 ミクロネシアの島々では母系の出自集団（リニージ）が土地所有の単位であり、資源を管理する首長を選出する母体であり、そして通婚を規制する大きな機能をもっています。したがって、人びとはその集団に帰属することによってのみ、島社会の一員として生活することができるといえます。

このような母系の系譜によってつながる人びとは、一つの島に住む場合、自分たちの土地の特定の場所に屋敷をつくり、そこに居を構えます。母系の系譜といっても、八世代か九世代前ぐらいしか彼らは覚えていないし、その集団も、世代がたてば、どんどん新しい集団に分かれていきます。ともあれ土地を共同で所有し、日々彼らが最も密接な



ココヤシの葉でつくられた家は、日中でも涼しい(1980年当時)。最近2度の台風によって家が崩壊し、トタンやコンクリート製の家も数軒建ちはじめたという。

関係をもつ出自集団レベルがリニージというわけです。つまり、サタワルの人びとの主食である食糧（ココヤシの実、パンノキの実、タロイモ）を収穫する土地（財）を所有し、使用、管理する基本的社会集団をリニージといいます。これら母系リニージは島のなかに一五くらいあります。こういうリニージが母系の系譜や固有の名前を共有することで、

いくつかが集まって大きな集団、クラン（氏族）を形成しています。

一口に財を共有するといっても、リニージ成員は複数の集団に帰属しています（図2 六六ベリニージ）。一つは、リニージ成員すべてをふくむレベル

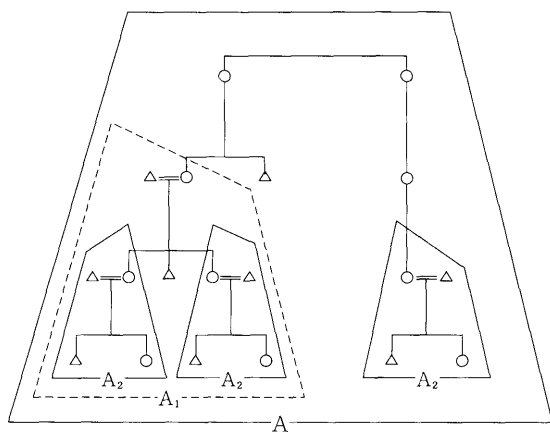


図2 母系出自集団の構成図

イ集団との中間レベルの集団 ( $A_1$ ) というように、重層構造をもっている。これらが島の構成単位ですが、同じ母系系譜をたどれたり、同じ集団名を知っている人びと、つまりクラン成員は当然ほかの島にもたくさんいて、相互に行ったり来たりする、お葬式に訪問しあったりする、ということから、かなり密な関係を保っており、財産を基本的に所有する最も小さなキョウダ

で代々受けついできた財を共有する自律的集団の単位 ( $A_1$ )、二つめは、リニージに婿入りした父親が贈与した財を共有する実の兄弟姉妹よりなるキョウダイ集団 ( $A_2$ )、三つめはリニージ全

イの単位から、先祖代々の財産を共有するリニージ、さらにこれがいくつか集まった大きな集団であるクランまで形成していて、大きなクランになりますと、成員の数はこの地域の多くの島々に分住し、総勢一〇〇〇人に達するものもあります。ただ、ミナンカバウとか、アフリカのアシヤンティ族に比べると、ミクロネシアの母系社会の人口は多くても一〇万人程度ですから、社会構成はシンプルです。いずれにしても、こういう集団の単位が土地を所有し、土地を分配し、管理し、だれに土地を使用させるか、そういうことを決定する基準になります。

■知識の伝承 食糧資源を獲得するだけではなく、こういう集団は、また秘儀的な知識の共有集団、つまり呪術、カヌーの建造術、あるいは航海術などを共有しています。ほかにも嵐をしずめる呪術、魚を呼び寄せる呪術など多くの伝統的知識があり、これらは特定の集団によって占有され、代々伝承されているわけです。とくに集団にとって必要なのは航海術です。集団のなかに外洋航海のできる人がいなかったら、外からのものが手に入らないわけです。かなりマイナーな立場に置かれます。

サタワルは人口五〇〇の小さな社会ですが、現在、八つの母系出自集団、母系クランがあつて、それぞれクランがあります。このクランの基準は草分け説、すなわち島にど



の集団が早く来たかという口頭伝承に頼っており、歴史的に事実かどうかわかりませんが、彼らはそれに基づいて首長を決めます。島のすべての資源を管理する責任者、あるいは島社会の秩序を守り政治的決定権をもつのは、第一位の出自集団出身の男性の首長で、彼が島全体の大首長を兼ねるということになっています。

首長とはいふものの、とくに変わった姿をしているわけではなく、ほかの島の男たちと変わりません。妻のために素もぐり漁で魚を獲ったりする。みんなから貢納物を集めて、不労所得でこのうと生活するような人ではないんです。小さな島ですから、パンノキの実がなくなってくる一〇月から翌年の三月ぐらいまではタロイモに依存せざるをえない、食べるものがなくなってしまう。そうすると、首長は、その島にあるすべての土地の利用を制限させます。女たちに一週間に三日の半日しかタロイモを収穫してはいけないとか、大量に消費しないように、細く長く食料資源を利用して島の人びとが生き延びられるような、そういう命令を出す。彼は第一位のクランから出ている首長ですが、島全体の土地を支配、あるいは統制する権利を預かっているということです。ですから、土地がリニージ集団に所有されているとはいえ、資源管理者としての首長の役割はひじょうに大きいということがいえるかと思えます。このよ

うなクランの間の階層差は、政治的場面にかぎらず、子どもの誕生や葬式などの儀礼的な場面でも見られます。しかし、日常的な活動において身分の差はあらわれない、それがサタワル社会の特徴でもあります。

■族外婚の規制 クランは、またインセスト・タブーと婚姻を規制する単位として機能しています。性関係や結婚を禁じられる相手については、母から子へ徹底的に教えられます。それはサタワル島出身者ばかりでなく、同じ名前や同系の名称をもつ他島のクラン成員との間にもおよびます。この禁忌を犯した者は島から追放されます。

このような母系のクランは島々に広がっていますから、異なる島の間での相互援助が盛んです。他の島からサタワル島へやってきた人びとは、同じクラン成員の家に泊まり、食事をしたり、土地を利用したりすることができまう。とくに婚姻の場合、族外婚の規制があるので、人口数百の島では結婚相手がいなくなる。そのときに島を結ぶクラン・ネットワークを頼りに他の島へ出かけ、配偶者を見つけるわけです。

以上のように、この母系出自に基づいて構成される親族集団、母系クランは、個々の島社会だけでなく、複数の島にまたがって組織され、結婚を含め、あらゆる人間関係の場で人びとの生活を保障する役割を果たしているというこ

とがいえます。

では、実際に母系社会の人びとの生活について、概観することにししましょう。

■島の生活 サタワルでは母系一族が一つの屋敷（プウコス）に住んでいます。だいたい五十数名がいつしよに生活しています。つまり母系リニージの女たちと婿入りしたそ

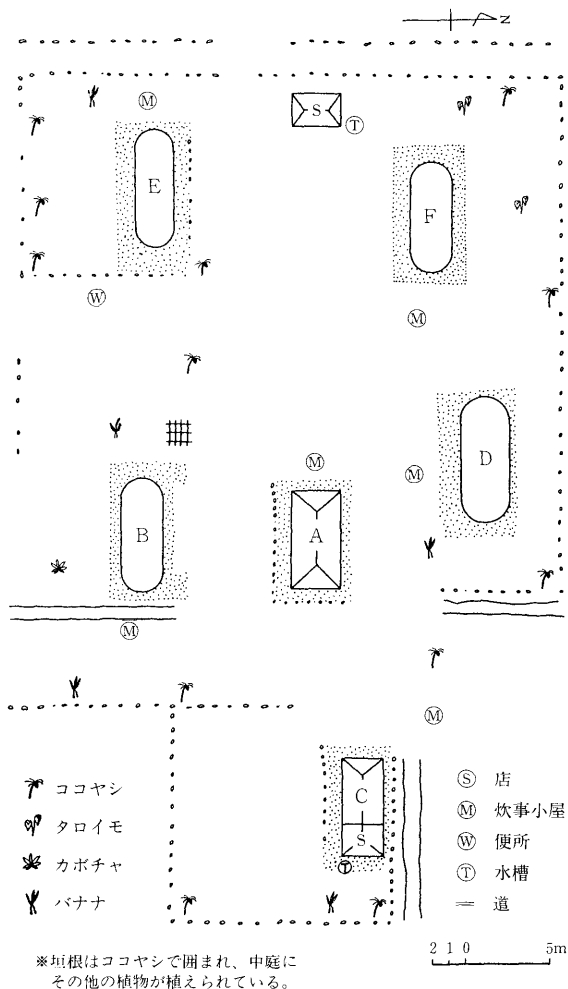


図3 屋敷（プウコス）の配置図

事の段取り、食べものの分配など指図します。

一族の女たちは、タロイモを栽培し、掘り起こしてきたイモを炊事小屋に持ち寄り、みんなで料理してそれぞれの家に分配します。ただ、現在では石油コンロなど便利なものが入ってきたので、いままでは大きな釜でみんなの食べる分だけ外の炊事場で炊いていたものが、家のなかで炊け

の夫たち、子どもたちで、そのほか養子も加わる。母系リニージの男たちはその妻のもとで暮らすわけですから、この屋敷にはいません。これがサタワルの母系（拡大）家族です。

この屋敷の中にいくつかの家があつて、基本的には核家族で住み分けています（図3）。母系家族の最上世代、最年長の女性には族長をつとめ、家族成員にたいしてタロイモ田の割りあて、毎日の仕



ある母系家族の集合写真。少なくとも10人から、大きな大家族では70人以上が一つの屋敷に住み、日常生活を共にしている。



タロイモ田で農耕するのは女性の仕事。ココヤシ、パンノキの実、タロイモ、バナナなどが主な食糧である。

るということになってきて、核家族単位で消費生活が営まれる傾向が顕著になってきています。いわゆるサラリーマン家庭の人びと、学校の先生とかが家族のなかにいますと、コーヒーとか砂糖とかは全員で消費するけれども、それ以外のもの、米とか衣類などは、やはり現金収入があつた者の自由になる。ということで漁労とか農耕で得た食糧を共

有する、いままでのやり方とはちがつた個別化がどんどん起こってきているというのが実状です。

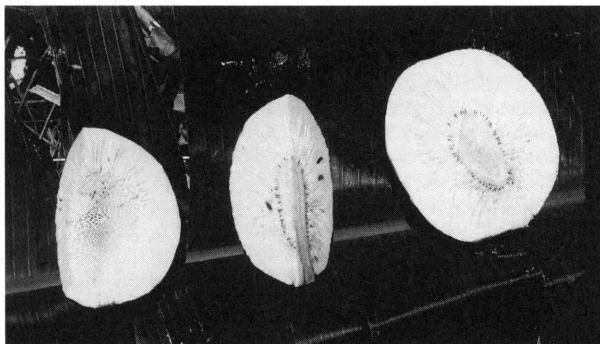
タロイモ田の作業は一〇月から三月にかけて一週間に三度の割合で行いますが、だいたい一回に二日分のイモを収穫します。クリスマスに盛大な祭宴を催すと、食糧は枯渇し、タロイモ一個が一日の食べ物という日がつづく、まさに節食の時期です。それにたいし、パンノキが実をつける四月から八月

は、その実が食べきれないほど収穫できます。パンノキの実が主食になり、タロイモは週に一回しか収穫しません。人間の頭ほどの大きさのパンノキの実は、良質のデンプン質におおわれています。一本の木に二〇〇個の実をつけ、一個でおとな一日分の食糧に十分ですから、飽食の時期です。パン果の実るころは海

も穏やかで、男たちは魚獲りに出かけることが多くなるのです。男たちは獲ってきた魚を一軒のカヌー小屋に集め、首長が分配する。それは赤ん坊から老人にいたるまで均等に分けられます。サタワルの人びとは飽食と飢餓寸前という、極端に異なる食糧事情のもとで一年の生活をしなければなりません。



炊事小屋で共同で料理し、つくったものをそれぞれ母系大家族の各世帯に分配する。基本的に食事は各家庭ごとにとる。



パンノキの実のデンプン質。これをゆでたり、搗いたものが主食になる。

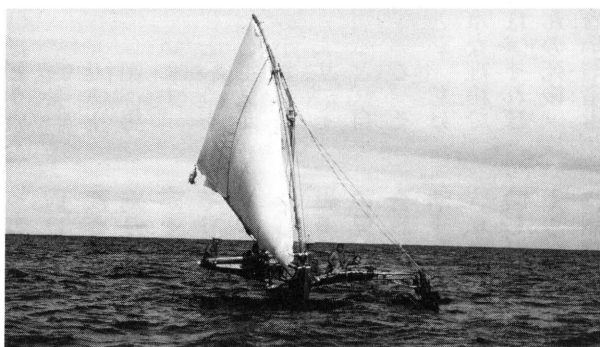
どもに財産を相続させる習慣があります。男は婿入りするときに、ココヤシ林や小さなタロイモ田でもいいから持参財を持っていく。妻一族の財産の運営と管理は、当然、女の族長にまかされているわけです。ですから、婿入りする男はたくさん土地と、たくさんヤシの木を持っていけば、妻の一族にたいして肩身が狭くない。ところが、その

一九五〇年ごろの人口は、だいたい二五〇～二六〇だったのが、アメリカ統治時代になってキリスト教を受容し、いま三倍の七〇〇から八〇〇ぐらいの人口になっており、アメリカの経済援助で生活しているのが現状で、当然、伝統的な社会の変容も余儀なくされています。土地の所有をめぐるいさかいなどが頻発していますが、それでも実際の社会制度は、それほど変わらず、母系制の基本線は守られているといえるでしょう。

■男の持参財 サタワルは母系社会ではありますが、父親が子



漁で得た魚はすべて均等に分けられる。首長の管理下で、まず女、次に子ども、長老、男の順に1匹ずつ分配されていく。漁獲が少ないと、男にまわらない時もある。



カヌーは漁のほか、島間の交通にも使われる。長さは10メートルくらい。

財を持つてくるためには、自分の父親が持参した財が少ないと、実家の財産に手をつけなければならぬ。そのためにお母さんとかお姉さんとけんかして——盛んな口争いになります——先祖代々の財産をむしろ取つていかねばならない。そうしないと、財産を持つてこない男は、「おまえの食べものはここにないよ」というかたちではつきり妻から

いやみをいわれますから。  
男たちにしてみれば、妻の一族の手前、一本でも多くの財、たとえばヤシの木にしても自分の子どもに贈りたい。しかし、彼の言い分をそのまま聞いたのでは自分の母系一族の祖先伝来の財産が減るわけですから、譲る、譲れないで、争うことになる。最終的には女の族長の裁量にまかされます。

このようにして母系一族というのは、先祖代々自分たちが母系の出自で受けついできたタロイモの田んぼ、ココヤシの畑、パンノキと、それから核家族ごとに婿にきた男性が持ち込んできた財産を合わせて、それを利用して食糧を獲得する、これが彼らの母系大家族の消費形態の基本になると考えていいと思います。

### 母系家族の人間関係

では、このような生活の中で、

夫と妻、母と子、父と子、あるいは親族との関係はどういうものか、見ることにしましょう。

■夫と妻の関係 夫と妻の関係で見ると、たとえばキリスト教を受容する一九五〇年代以前は、女は平均三・二回、男は平均二・八回ぐらい、結婚、離婚を繰り返しています。これは死別ではありません。それぐらい夫婦関係というのがぜい弱というか、不安定である、これが一つの特徴かと思います。一九五〇年当時で人口三〇〇ほどの小さな島社会では、結婚可能な適齢期の異性は限られています。そのうえ、婚姻関係を禁止するタブーがある。となると、自分の結婚相手というのは幼なじみで、よく知っている。それで結婚すると、あいつは口汚いとか、きついとか、怠け者だとか、お互い遠慮がないので、それぞれ簡単な理由で離婚することに躊躇しません。適齢期の男と女は、それほどいないし、なおかつ族外婚ですから、オジさんの死後、二〇歳年上のその奥さんと結婚しなければならぬ若者もいますし、その逆もあります。そういう年齢的な不一致もあって、離婚、再婚がかなり頻繁に行われています。ただ、現在は教会によって離婚が禁止されています、特別な理由がないかぎり。ですから、別居したままの夫婦もかなりいます。

さて夫というのは持参財を持っていたうえで、なおか

つ妻の機嫌をとり、妻の要求、妻の期待には応えなければいけない、それが伝統的なサタワル社会の「夫の道」です。夫が魚獲り、ココヤシのジュース採取、コブラづくりや下刈りなどの仕事を怠けていると、妻は夫に文句をいう。夫がそれを無視すると、「もういい、出ていきなさい」となる。そうすると夫は持ってきた財産を置いたまま、自分の寝るためのマットと枕と、上にかけるものをくるんで実家に帰るしかないのです。

そのほか夫は妻の兄、弟たちにも頭が上がりません。妻の兄弟はほかの村へ婿に行ってますから、日常的には顔を合わせない。しかし、たまにやって来たときは、ほんとにサーバントのようによく尽くします。

私の調査中に、私の親友であった小学校の校長先生が経験した婿づとめの例を話しましょう。彼は月に七〇〇ドルぐらい給料をもらっていました。それで夏休みになると彼は州都のあるトラック島へ夏期講習に出かけ、銀行に預けておいたお金をおろして使うわけです。そうしますと、テレビなんかすぐ買えます。ビデオとテレビと、日本製のジエネレーターの三点が三〇〇〇ドルか四〇〇〇ドルぐらいのものですから。それを持って島へ帰ってきました。そうすると妻のお兄さんが「おまえ、いいのを持ってるな。ちよつと私に貸してくれないか」、つまり俺によこせというこ



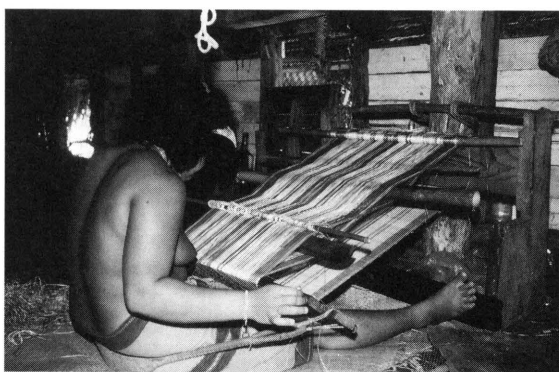
子守りをする未婚の女性。着るものは腰布のみ、顔は口紅でさまざまなデコレーションを施す。

とです。校長先生とはいえ、妻の兄弟に従わざるをえません。それぐらい男というのは妻はおろか、妻の兄弟や一族へ貢献するというのが、夫としての男の定めなんです。

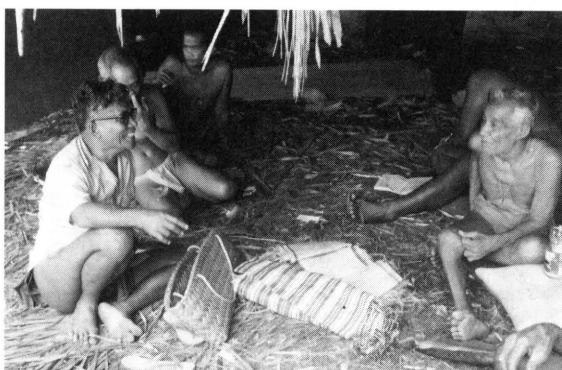
■母と子 次に母と子の関係ですが、とにかく母親というのは子どもにたいしていろいろなことをしつづけます。していいこと、してはいけないこと、そして一族の土地の境界はどこか、どこに土地があるか、わが家の代々の系譜や母系の一族にはどういう人びとがいるのか、お兄さんにたいしてはどうしなければならないか、オジさんにたいしてはどうしてはいけないのかというようなことを、七、八歳の

ころからかなり厳しく教えます。伝統的な子育ては、母親が妊娠したときから始まっているのです。出産、誕生にいたるまで、食べるもの、着るもの、日常生活のあらゆる場面で、さまざまなタブーがあり、周囲の者たち、とくに夫は、この間、じつに細々とした心くばりをします。産小屋での出産のときは、新生児の父親の近親者(父親の姉妹、母)が立会い、食べ物や毎日届けるなど大きな役割を果たします。現在では、出産そのものが妊婦の家で「保健夫」によって行われますが、父親の近親者が手伝いに通うという私たちの慣行がつづいています。無事に生まれた子どもは「霊的存在」として、一族で大事に育てられる。子育てをなおざりにすると、悪霊に食われてしまうと信じられているのです。限られた島の人口を保つための、さまざまな禁忌は現在も生きています。

幼児期の子どもたちは、親から社会秩序を教え込まれるだけで、かなり自由に遊びながら初歩的な生活の仕方を身につけてゆきます。その後、一〇歳を過ぎるころにはおとなの世界に仲間入りするための教育が始まる。女の子は妹、弟の子守りをし、母親たちと森へ出かけ、タロイモ田の作業を教えられたり、機織りの技術を習得したりします。一方、男の子たちは父親に連れられ魚獲りに出かけたり、カヌーづくりを手習ったり、「真の航海者」としての訓練が始



腰布づくりは女性の大事な仕事。バナナやハイビスカスなどの内皮から糸をつくり、地機で織る。腰布を身につける年頃になると、一人前と見なされる。



織物は原始貨幣の一つでもある。島と島の交易、または損害賠償として使われたり、最も価値あるものとして流通している。

まるわけです。このころから、彼らは「働き手」として、島社会で生きていくうえでの行動様式と技術・知識を身につけていくのです。彼らにとっての母親は実母だけではありません。母の姉妹、イトコを含め、五、六人の母がいるのですから、子どもたちは多くの母の手で育てられることになるし、逆に彼女たちは多くの子どもたちを持つことになる。いわゆる母系一族の根幹となる母と子の関係は、そう

共同の漁労活動があつても、男の人は子守りをしているときには漁獲りに出なくてもいいというぐらい、父親は子どもを育てることに大きな責任と情熱を注いでいるといえると思います。

そして子どもにとってみても、父親というのはいろんなことを教えてくれる人生の師でもあり、ほしいものを買ってくれますし、一面、友だちのような関係でもあります。

いうかたちで成り立っているのです。

■父と子 では父と子の関係はどうでしょうか。さきほどから、いろいろ話しているように、父親は一所懸命、子育てに励みます。幼児のときから、妻や女の人たちが田んぼへ行つて面倒をみる人がいなくなると、男は幼児を連れて、ほかの男たちがカヌーをつくっている、海岸にあるカヌー小屋へ行つて子守りをしたりする。首長が指示した男の





男の仕事はカヌーづくりと航海。手斧一つでパンノキを削り、約3ヵ月で仕上げる。



カヌーの竣工式の儀礼。神への供物として織物が捧げられる。

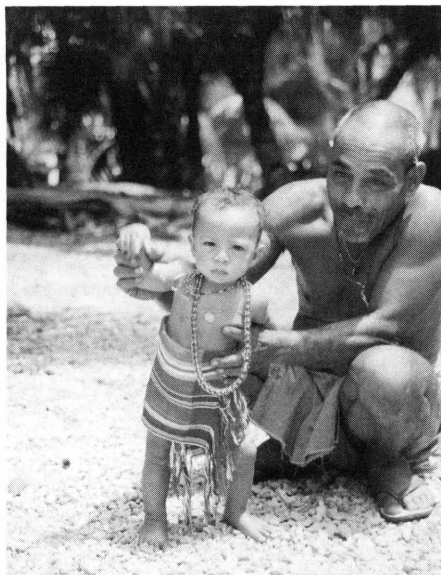
父親にかぎらず、父の一族、父の実家へ行つて、子どもたちは料理してあるものを無断で食べてもかまわない。父親の一族の畑へ行つて、パイナップルをかつぱらつてもかまわない。それぐらい、父および父一族にたいするある種の特権を子どもたちは持っている。

ただ、ここでちよつとことわつておきたいことは、子どもたちは父親から持参財としてタロイモ田やココヤシの

林、パンノキをもらっている。そのうえに子どもたちは父親の実家へ行つて何をしてるかまわない、というけれども、お父さんの一族の家を直すとか、カヌー小屋を修理するときには、男の子どもたちは率先して労働提供しなければいけないし、女の子どもたちは料理を持っていかなければいけない。そういう父の一族への役割を果たさないと、父の一族は、子どもにあげた土地を取り返すことができません。

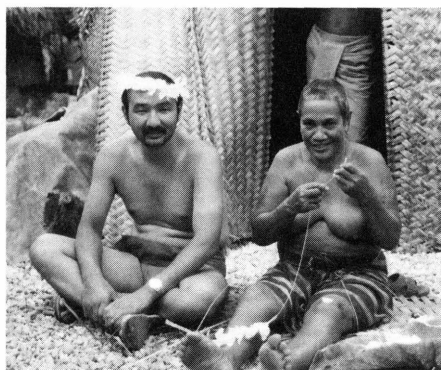
ですから父と子の間には親密な関係がありますが、その裏にははっきりした権利・義務の関係があるんだということがこの社会の一つの特徴としてあげられると思います。

■母方オジの力　　ようやく一人前に育てあげた子どもは、父親の手から離れ、母方のオジの支配下に置かれます。彼が後見人であり、われわれの社会の父親のような役割を果たす。子どもにとっては恐い存在です。母方のオジは離れた村にいたりしますが、たとえば一二、三



父と子。父親はミルクを与えたり、遊んでやったり、一所懸命、子育てをする。

歳の男の子がほかの人とけんかして傷つけたりすると、実の父親は何もできません。母方のオジが解決してくれる。それから、いまはこういう小さな島からどんなアメリカのハワイ大学とか、オレゴン教育大学などへ留学する学生がいます。そのときに子どもたちが留学していいかどうかという最終的な許可をもらうのは、お父さんでもなければお母さんでもない、母方のオジさんです。オジさんがいいといわなければ留学できない。あるいは子どもたちの結婚に関しても、オジさんの許可がないと結婚ができない。このように母方のオジは、成人した彼の姉妹の子ども、甥、



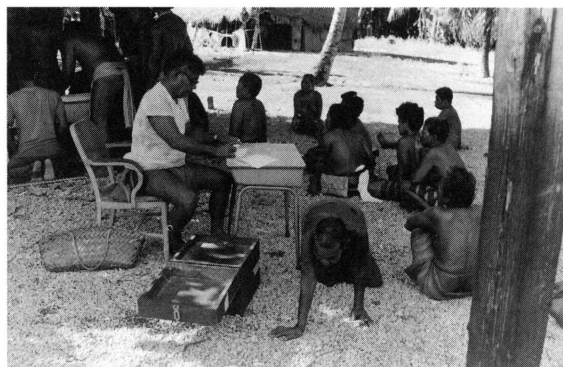
島の養母がつくった花飾りをつけて（左が筆者）。

す。

■異性キョウダいの力 この社会では、どんな家族でも必ず異性のキョウダイ、すなわち娘と息子を持たないと、その家族は成り立たないといえます。それは、いかに異性キョウダイというものが家族のなかにおいて、あるいはこの社会のなかにおいて特殊な位置というか、重要な役割をもたされているかということなんです。

異性キョウダイ——これは実の兄弟、姉妹だけではなくて母方のイトコもキョウダイも入ります——の間では、とくにああしてはいけない、こうしなさい、という規範が集

姪の言動を監督し、責任をもつ地位にあるといえます。ですから、サタワルの男たちは「父親としての立場」と「母方のオジとしての立場」という二つの顔をもっているということなんで



弟が座っている側を四つん這いになって通りすぎる姉。異性キョウダイ間の挨拶行動は、厳格に行われている。

中的に決められている。父と娘とか、母と息子の間では許されるけれども、兄と妹、姉と弟の間ではしてはいけないことがある。たとえばお兄さんが使ったコップ、フォーク、ナイフ、あるいはお兄さんが食べるために使った鍋類とかは、姉妹は絶対に使ってはいけない。あるいは逆に男の人は、自分の姉妹の干してある腰布を見てはいけないとか、また、兄弟、姉妹はいっしょに家の中にいてはいけないし、

食事もしては

いけないなど、厳格なタブーがけつこうあるんです。

それから女のキョウダイは、兄であるうが、自分の異性のキョウダイにたいしてはあいさつ行動をしなけ

ればいけない。相手がとっている姿勢よりも一段と低い姿勢、立っていれば腰を曲げる、座っていれば立ってもらうか、四つん這いになって這って歩く。自分の男のキョウダイの前でそういうことをしなければいけないし、敬語も使わなければいけない。さきほどいいました、どんなに恐い母方オジであっても、女はべつに敬語を使う必要もないし、あいさつをしなくていいんです。しかし異性キョウダイ同士の間はかなり忌避行動が多いんです。

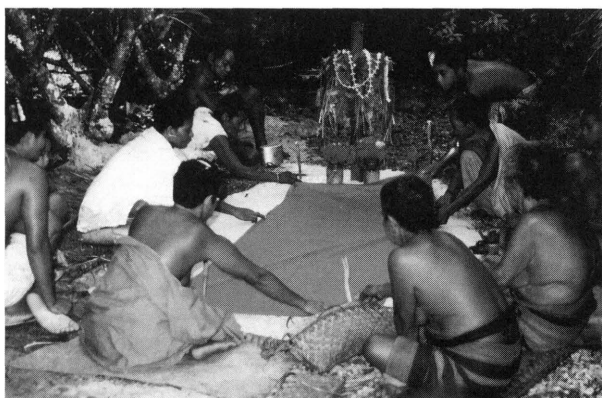
また男の子は一二、三歳になったら、絶対に女性キョウダイのいる自分の家では寝てはいけない。少年たちは思春期の前ごろからカヌー小屋へ行つて、男たちだけで寝なければいけない。そういうふうな異性キョウダイ間での距離をおく行為というものが、極端に多く規制されているということです。

これまで母系社会のなかでの女の役割と男の役割についてざっと見てきたわけですが、異性キョウダイ間とはいえ、女があいさつ行動をしたり、敬語を使うというのは、いかにも男尊女卑的というか、奇異な感じがします。しかし彼らは「女は男のキョウダイを偉くしなければならぬ」からだと説明します。

そこで、このようなタブーを犯した場合はどうなるか。当然、社会的制裁、宗教的制裁を受けることになります。



訪問客に踊りのサービスをする女たち。ここで男女がいっしょに踊ることはない。



死者の葬送儀礼は女の役割。女の一族が集まり、4日4晩の夜伽をして、靈魂を天に送る。

定されているところに、この社会の特徴があらわれているように思えます。

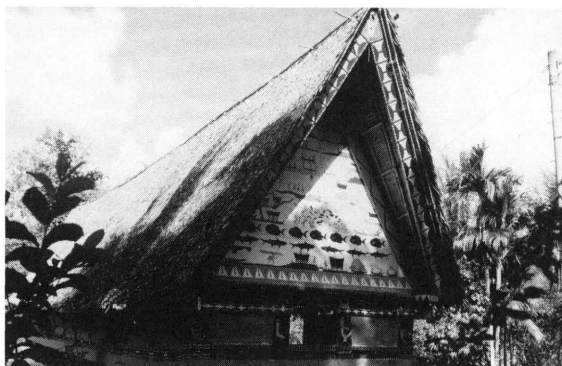
以上、見てきたところからいえることは、ミクロネシアの母系社会というのは、夫と妻の関係ではなく、キョウダイ関係を核として成り立っているということです。それは異性キョウダイ間に規定された多くのタブーの存在、敬語使用や表敬行動などに伺えるわけです。

ところでミクロネシアでは、パラオ共和国もまた基本的には母系社会です。サタワルと比較する意味で、このパラオの社会も簡単に紹介しておきたいと思っています。

## パラオの母系社会

キリスト教が浸透している現在でも、規範を犯したら、祖先の霊や超自然的なものから罰を受ける、「リヤ」という觀念が生きているのです。それほど厳しく異性キョウダイ間の行動規範を遵守するということが、この社会に生活している人びとの行動の基本になっているわけです。いづれにせよ、対人関係において宗教的制裁をともなった禁忌が規

パラオには、戦前（一九二二～四五年）、日本の統治領であった「南洋群島」の統治本部の南洋庁が置かれていた。で



アパイという伝統的な男子集会所。パラオの各村に2棟はあったが、現在は全島で3棟しか残っていない。



パラオの日本統治時代の建物、パラオ支庁。現在は裁判所として使われている。



アメリカとの独立交渉で、住民投票を呼びかけたスローガン。日本語、英語、パラオ語が使われている。

すから年配の人たちは、かなり日本語がじょうずです。アメリカ時代になっても、パラオではパラオ語、日本語、若者は英語という三つの言葉が使われているんです。ここはサタワルと同じように母系社会なのですが、異なっているのは、まず子どもは生まれると父親のもとで生活して成長する。そのうち娘は嫁にいき、息子は自分の母親の里、母方オジのいる一族の本拠地へ移っていく。三〇半ばとか四

〇歳ぐらいに自分の妻と子どもを連れて、父のところから自分の母系出自集団のある村へ移っていくわけです。そして自分の一族の土地の世話をすることになるんです。娘たちは自分の母親の土地に住むことはほとんどありません。離婚したり、夫と死別した場合以外は。

ところが、このパラオ社会の特徴は、女の姉妹が、男の兄弟にたいして、経済面で献身的に援助するんです。たと

えば、姉妹は自分の兄のお嫁さんが自分たちとつきあいが悪いとなると離婚させる。そこまで姉妹たちが介入する。そして男が死ぬと、女の姉妹たちは自分のキョウダイの妻とその子どもたちに土地、家、それから子どもの養育費と称して、現在ですと三〇〇万円ぐらいのお金を渡して、「あなたはまだ私たちとは縁がない」と離別させる。この手切れ金は女のキョウダイが中心となつて集めます。経済的な分野はすべて女性にぎっているんです。

ですから家族というのは、パラオ社会においては男の死によつて崩壊してしまうわけです。妻およびその子どもたちは、夫および父親の一族の土地に残るということを許さ



冠婚葬祭、誕生祝いなど儀礼的な行事を「シュウカン（習慣）」と呼んで、ひじょうに盛大に祝う。写真は子どもが生まれた披露の儀礼で、女性がココヤシのオイルを体に塗っている。

ない社会です。追い出します。そのかわり、女性キョウダイたちは男性キョウダイの妻が、自分たち母系一族の土地を管理し、守ってくれたことにたいしてのお礼として、土地を与えたり、一族の男性が持つ子どもたちの養育費としてお金をやるのです。こういうときにお金を用意するのは女のキョウダイなんです。女たちにそういうお金があるわけありません。すべて旦那からむしり取る。たまつたものじゃありません、旦那は。

家の新築祝いとか結婚、葬式、誕生祝いなどのさいに、かなり盛大な儀礼的交換を行います。一〇〇人以上の客に食事を振るまい、多くの品物や数百万円ものお金を贈与し



女性のつな引き。日本時代に導入した運動会が、現在でも「ウンドウカイ」の名で続いている。



パラオの「シュウカン」にはたいへんな費用がかかるが、その資金の調達はすべて母系一族の女性が行う。

ます。また、一〇〇〇万円で家を新築できますが、男性はその費用を銀行からローンすることなく、女のキョウダイに頼めば調達できます。それをパラオでは、日本語から借用して「シュウカン（習慣）」と呼んでいます。そのたびに一軒の家から数百ドルのお金が飛んでしまう。とにかくパラオの男は妻にお金をむしり取られる、というので、パラオの女性と結婚した他の島の男たちはほとんど離婚します。とてもやっています。いけない。そこまでしてパラオの女たちは自分の夫から金をむしり取って、基本的には自分の男のキョウダイを助ける、偉くする、強くするわけですね。

だいたい母系社会において女性は何れぐらいの政治

的権力をもっているのか。いままで民族誌的な事例としては、イロコイ同盟（アメリカ・インディアン五部族の政治連合）において、イロコイの母系一族の女たちには、自分たちの首長および男性の政治的リーダーを選ぶ権利があったといえます。それと同じ力をパラオの女性たちは持っているんです。母系一族の女性たちは「女性評議会」というものを開く。そこで現首長が死んだあと、次の首長をだれにするかということ——いちおう系譜上では決まっていますが——決めます。五、六人の男の品定めをして、その候補者の中から女性評議会が決定した者が首長になれる。あるいは首長にかぎらず、いろんな称号や役目がありますが、それもだれに任せるかを女が決めます。しかし女が首長になることは少ない。女性が社会の表へ出てくるということはないのです。

パラオは一九九四年、世界で最も新しく独立した国です。そのためにパラオ人とは何か、文化的アイデンティティを何にするかなど、国民意識を高めるための方策について、いま大統領はじめ国家レベルで取りくんでいるわけです。そこで国家が全国の——全国といっても人口一六〇〇〇ですが——全州の母系一族の女性族長を集めて毎年三月に女性会議を開いて、その検討を依頼しています。つまり、パラオの国のシンボルは何にしたらいいのか、ア

イデンティティーをどこに求めたらいいか、という国家統合の方策が母系出自集団單位に議論され、その女性族長の意見に基づいて決められようとしているのです。

一方、男性からみれば、とくにアメリカへ留学した若いエリートたちのなかには、儀礼的なことにお金を費やすことにたいして盛んに反対するものもある。しかし、「シユウカンに關与することこそがパラオ人であることの証だ」ということで女性會議はそれを存続することを決めて、大統領に諮問し、大統領はそれを守ると述べています。ということ、結局、パラオ社会では母系の一族の長としての女性の政治的な力を無視することはできない、いまでも隠然たる力がかなり認められているとみていいと思います。

ただ、伝統的な儀礼のいきすぎにたいしては生活改善をしているけれども、ひじょうに重要なパラオのナシヨナル・アイデンティティーを策定するようなときには女性が積極的に参加し、大きな発言力を持っているということ、す。いまでは女性の国会議員もパラオでは何人かいます、女性の政治的参加もかなり進んでいるといった状況です。そういう意味で、パラオはさきほど見たサタワル社会とは、同じミクロネシアでも、かなり女性の経済的役割や社会的地位という点で異なっているということなんです。

## 変貌する母系社会

最後に、こうした母系社会が、現在、どのように変化しているか、ここ一〇〇年の間に起こった経済的、社会文化的变化について述べてみたいと思います。もちろん、ここミクロネシアにかぎらず、先進諸国、欧米との接触によって、大きく社会変化をこうむった国々は少なくありません。とくにキリスト教の受容は、それぞれの国における伝統文化の変容を強くすすめてきました。他のトラック社会に比べて、小さな孤島、サタワル社会は、それほど大きく変わってはいないというものの、異文化との接触は、いろいろな生活の場面で変化をもたらしています。

たとえば、さきほど話した出産の場合でも、昔は産小屋にこもって出産し、月経中の女性は月経小屋に隔離されたものです。これらは、キリスト教を受け入れてから廃止されました。現在は病院での出産が多くなっている。それで、おもしろいのは、最近、女性の集会のための家というか、州政府が女性専用の鉄筋コンクリートの会館をつくったんです。そうしたらその利用をめぐって、女性はやはり昔のやり方を守るべし、月経期間中はその家にこもるべし、お産もそこで行えなどと、伝統を復興しようというような動





トラック諸島の一つ、トノウス島。日本統治時代、夏島と呼ばれ、周辺の海底には、いまなお大戦で沈没した日本船が多く沈んでいる。

きが首長を中心に出てきている。なぜかというところ、キリスト教以前、女性の月経は不浄ということで、その女性を見た航海者は病気になるとか、漂流するとか、男性の航海に大きな災害をもたらすとみられていたわけです。キリスト教の受容後、航海の事故が多発し、航海術にたいする危機感から、やはり伝統を見直すべきだというか、昔の

伝統を興す、そういう風潮が長老の間から起こっています。母系制を維持、存続させるには、人口と生産のバランスのとれた安定した経済基盤が大事だと指摘する研究者もいます。ところが、昨今、トラック社会では、人口の急激な増加によって、母系一族の共有地がどんどんなくなっているのです。男性が勝手に処分するからです。そのため限られた土地の売買をめぐる裁判沙汰まで起こっているんです。

トラックというのは九二平方キロの島々に四万人余りが住んでいて、現在は約一割の人がびとが、グアムとかサイパンの日本人が経営する観光産業に従事するため出稼ぎに出ています。いまでは男性の現金収入なしには生活できないという現象が、独立後の一九八〇年代以降、この一〇年間で進んでいるわけです。そうすると、夫方居住の核家族が出現して、伝統的な母系家族が減少していかざるをえません。つまり、男性の経済的自立化傾向ということです。ただ、いまもいままじょうに、トラック社会はこうした経済体制にまきこまれながらも、なお、母系のしくみを根強く維持しております。

母系一族のネットワークというのは、これまで族外婚の単位だとか、日常的な生産活動を共にする単位として機能していたんですが、現在では、これが国会議員の選出母体

になってきまして、一族のシンボルとして鉄筋の集会所を  
 つくってみたいとして、母系一族が連帯を強め、選挙のたび  
 ごとに運動する。その結果、大きな人口をもつ母系一族か  
 ら知事が出たり議員が出ると、母系一族の成員が公務員に  
 なれ、経済的に潤うなど、現代的な社会制度のもとでも母  
 系のネットワークが見直されてきているという傾向がみて  
 取れます。



トラックでは、炊事、料理から農耕まですべて男がや  
 る(上)。普段の食事はもとより、大きな儀礼用の料理  
 を用意するのも男の役目(中)。女は男のつくったもの  
 をもって遊びに行く(下)。女性が台所から解放された  
 珍しい社会。

以上のように人口圧により土地共有制がもはや母系出自  
 集団の存立基盤とならない状況が、ミクロネシアの母系社  
 会では顕著になってきています。しかし一方で、母系イデ  
 オロギーがいつそう高揚し、近代国家のなかで政治をも左  
 右する力となっているのです。この「伝統の再発見」とも  
 いえる傾向は、母系社会にかぎらず、世界各地の少数民族  
 のなかで起こっている現象だろうと思います。

## おわりに——母系社会のゆくえ

いままで述べたように、ともかく母系制社会というのは、生物学的な母子関係に基づいて文化的に母子の役割を規定し、男性をそこから分断、排除するという社会、これが第一の特徴だと思えます。それにたいして父系社会は逆に、生物学的事実があいまいな父子関係というものを、文化的につくりあげることによって、女性を他者として排除する、そういう原理で成り立つ社会です。

いいかえると、母系社会は生物学的な出自という原理を中心にしながら、一つの社会制度、すなわち相続とか、地位の継承などを文化的に規定して、母子を軸にして一つの集団を形成する社会であるということです。そういう母子連合の前においては、男性というのは太刀打ちできないから文化的に分断され、排除される。結局、母系社会における男の生き方というのは一所懸命、父子のつながりを求めてがんばって子どもを育てるけれども、自分の育てた子どもたちは他人に取られざるをえない。母系の出自関係と婚姻関係の板ばさみの境遇にあるわけです。

母系社会の男性は夫、父としての地位や役割と、キョウウダイ、母方オジとしてのそれ、つまり相反する立場に身を

おいて生涯を終える。それを「母系のパズル」といいますが、男の権威・権力や地位・役割が一元化しないような社会というのは不安定である。したがって貨幣経済の波及や、資本主義の導入、そして人口増加や父系社会の影響などの要因で、たちまち崩壊してしまうのではないかとわれてきました。事実、アフリカのいくつかの母系社会においても、男性がプランテーションとか、あるいは工場の労働者になって経済的に自立、自活する。つまり男性が経済的なリーダーになると、母系社会は一晚のうちに変化してしまうだろうという報告も出されています。

しかし、これまで紹介してきたように、私の印象では、母系のしくみというのは、その根底はなかなか変化しづらい、むしろ近代的な社会にも対応しうる柔軟性をもっている社会だということがいえると思います。たしかにサラリーマン、いわゆる給与所得者というかたちで男性の経済的自立が急激に可能になってきておりますが、だからといって、夫婦関係を基盤にした近代的な家族関係（核家族）に移行することにはならない。いろんな面で母系出自集団は変化したとしても、母系の兄弟姉妹の紐帯を核にする母系社会の基本はなかなか消滅しないのではないかと感じております。

以上、簡単ですが、私からの話題提供とします。